

地域社会で生きる

私たちが暮らす地域や社会は多様性に満ちています。それぞれ生まれた場所や育った環境が異なり、誰一人として自分と同じ人はいません。みんながそれぞれ違っていて当たり前。その当たり前を受け入れることが、発達症の人を地域で支える第一歩なのかもしれません。

特別ではなく身近なものとして
地域や社会に受け入れられるか

地

域生活支援センター「ゆずり葉」では、作業療法士の専門の職員が、障害の有無にかかわらず、メンタルヘルスに関するさまざまな相談を受けています。そのうち約1割が発達症の人で、割合はここ数年増加傾向にあります。発達症の特徴によって、いわゆる2次障害に繋がってしまう、精神面に支障をきたしてしまう人もいます。

例えば、一般の高校・大学を卒業し、就職して社会に出てから、あまり周囲と上手くいかずに、会社に行けなくなってしまう。そういった人

から相談を受けて、過去の遊びや対人関係の特徴、家庭環境や学校の様子を聞いてみると、発達症の特徴が認められるケースもあります。

そのように、私たちの身の回りは発達症の特徴を持ちながらも、生活している人がたくさんいます。まずは、発達症は決して特別なものではなく、とても身近なものであることを知っていただきたい。

大切なのは、社会に受け入れられて生活が出来るかどうか。「ちょっと変わっているよね」というくらいに、周囲から関心を寄せられながら、何気なく生活している状態であれば問題はありませぬ。発達症の特徴があっても、日常生活が出来れば決して「障害」ではないのです。

習得した知識や理解よりも
日常の気づきを大切に

設立当初は、市民の人にも理解を深めていただくために、講演や研修を開催していました。しかし、活動を続けていくにつれて効果に疑問を感じるようになり、徐々に地域の活動にシフトしていきました。

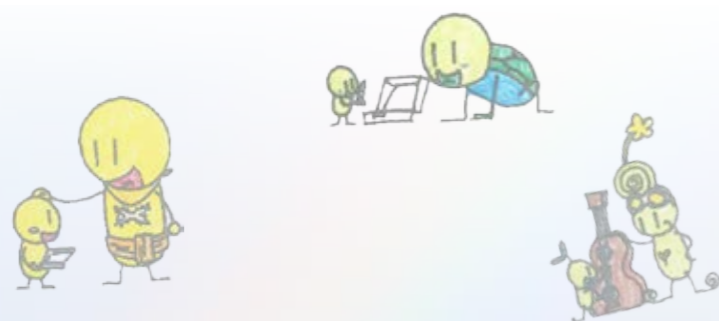
今では、地域のイベントなどに参加して来場者とふれあったり、事業者さんの理解を得て職場で一定期間働いたり、実際に地域や社会に溶け込む活動に重点を置いています。活動の中であいさつを交わしたり、「ありがとう」という声をかけてもらえたりと、普段の何気ないやりとり

が大きな意味を持つのです。特に気を使うことなく、その人の良いところや強みを見つけていくことが大切。発達症や障害について、一から十まで理解する必要はありません。それよりも、生活の中での交流によって、理解や関心が少しずつ自然に育っていくのが理想です。

私たちが普段何気なく使っている「普通」や「当たり前」という言葉が指すもの。そして、「いきいきと暮らす」とはどういうことなのか。発達症や障害を持つ人は、新たな気づきを与えてくれます。多様な価値観を認め合う地域を目指すうえで、そういった気づきは欠かせないものなのです。



セルフあじさいで、自立訓練に取り組む大祐さん。この日は、商品の販売促進用のポップを作成していた。お客さんの目を引くように、多くの色を使用する。次は何色にしようか。



白と黒の間に広がる
この世界を彩る無数の色。
私たちは個性という色を持っています。

「赤・青・黄・・・」と私たちは分けますが、
全ての色はグラデーションの中にあり、
本来そこに壁はありません。

それぞれの色を互いに尊重し、認め合う。
齋藤大祐さんの描く絵は、
そのことを教えてくれているのかもしれない。



地域生活支援センター
ゆずり葉

相談支援専門員
遠藤 真史 さん

9月11日黒磯駅前通りで行われたもったいない市での一コマ。この日は、来場者と交流しながら、梱包用の「プチプチ」に絵を描くワークショップを実施。多くの人が訪れ、思い思いの色のマジックで絵を完成させた。



NPO法人那須フロンティアは、メンタルヘルスを中心としたまちづくりを進めるために平成11年に設立。地域生活支援センターゆずり葉を運営し、主に精神障害者が地域社会で生き生きと生活できるように支援しているとともに、地域社会におけるメンタルヘルスの問題に積極的に取り組んでいる。
▶ゆずり葉 ☎0287(63)7777